

創元選書

東
郷
豊
治

良
寛

東
京
創
元
社

良 寛

昭和三十三年九月十五日
昭和三十三年九月二十日
初版印刷
初版発行



定価四五〇円

著 者 東 郷 豊 治

発 行 者 小 林 茂

印 刷 者 曾 根 盛 事

発 行 所 株 式 東 京 創 元 社

東京都新宿区新小川町一ノ一六
電話九段(33)八五一(代表)
振替東京一五六五

口絵写真製版印刷 東京都文京区丸山福山町四 株式会社興陽社

扶桑印刷・小高製本

序

現代では、人間はだれもかれもみな社会の要求する一定の規格に合格するように行動している。型破りでは生活できない仕組みになっている。昔でも破格調な行動はたちまち生活の困難を伴うたであらうけれど、私たちの祖先でそれを立派にやつてのけたこんな人間がいる。

その人は生涯をこころ豊かに乞食し歩き、山中にひとり棲んで自然の声に耳を傾けた。しかし、里にも出て、子供と遊び農夫と酒を酌んだ。子供と遊んでは日の暮れるのを忘れ、酒を飲んで田の畦あぜに眠った。また、詩人と会うては詩を語り、歌人を招いては歌をよんだ。詩は四百、和歌は千に余り、批評家は口をそろえて、寒山の風雅を体し万葉の余韻を伝えているという。さらにそれらの詩歌をしるした彼の書は今日にのこっていて、見る人たちはまことによいという。その人は良寛である。

私は嘗て彼の生活していた越後に十年あまり在住し、その間にゆかりある諸家に伝える彼の遺墨を尋ねて歩くのがなにより楽しみであった。そのときに採集した資料を経とし、自分なりの

解釈を緯として、何回か草稿を改めつつ、漸くこんど本稿が成った。私は執筆のはじめに三つの方針をたてた。その一は、従来、彼はとかくその文学なり宗教なりに偏ってまぶしく仰がれてきたが、彼の全行動を観察し人間像を分析することである。その二は、先輩の良寛論をただし、また先輩の看過した問題に新しくふれることである。その三は、彼の資料に関してはつとめて遺墨に直接より、刊本による場合は、その最初の掲載書によることである。私としては精根を傾けて努力したつもりであるが、さて、でき上ったものはその一も果されていないようで恥ずかしい。けれども、もし拙著を通じ、この人の生涯を知って、だれかを勇気付け、だれかを慰めるのに役立てば、それに越した喜びはない。

参考にした文献はすべて書中に掲げたので、重ねてここにはしるさない。また、彼の年譜を添えなかったわけも、本文を読めば、諒解していただけるだろう。図版は七、八倍のものを用意したが、厩大になりすぎたので潔く割愛した。なお図版の遺墨を所蔵される方々のお名前を本文中に掲げたものと洩らしたものとがあり、礼を失したことを深くお詫びする。これらの資料を提供して下さった方々、及び本書のためにがねん厚意と激励とを惜しまれなかった方々を回想して、だれとは名前を掲げないが、深い感謝をささげたい。

昭和三十二年七月

著 者

図版解説

口絵図版

第一図

良寛像 鉄斎筆

* 良寛をよく知る貞心尼の教示和に従い、藏雲和尚が描いたという肖像を、さらに鉄斎が模写したものである。

第二図

心月輪 良寛書

* 俗に鍋蓋とよばれているが、用材の裏面に中央の切込みはない。

(二三七頁)

第三圖 百花春 良寛書

第四圖

にくきものは。人の中をへだつることいふ。人にものおしへするによそごと
いふ。人のかくすこといふ。人にきずつくることいふ。人のいやがることいふ。人には
ちかゝす事いふ。人のこまることいふ。人をおどろかすおどけいふ。人をそねむこと
いふ。人まどはしのこといふ。人にはらたゝすこといふ。人を見かぎりたこといふ。
人にへつらふこといふ。人をあなどることいふ。人のことばをもどし、理を非にまぐ
ることいふ。おのがえてにかけていふ。

(一一二頁参考)

第五圖

若^{もし}見^み邪見人・無義人・愚癡人・暗鈍人・醜陋人・重惡人・長病人・孤独人・不遇
人・六根不具人者、當^{まさ}レ成^{なり}是念。何以救^{たす}護^ご之。從^{したが}佗^た不^た能^え救護、假^か不^た可^べ起^{おこ}憍慢
心・高貢心・調弄心・輕賤心・厭惡心。急可^{いそ}レ生^な悲愍心。悲愍心若不^し起者、生^な慚愧
心而深可^{いそ}レ恨^{にく}我身。我是去^い道^{だう}太^{はなはだ}遠^{とほ}所以者、何辜^{いかで}負^{おそ}先聖。故聊^{しか}以^も之自警云。

第六図

ゑにしあればまたこのたちにつどひけりはなのひもとくきさらぎのよひ

* 右方の「うぐひすのはつねはけふとわがいへばきみはきのふといふぞくやしき」は阿部定珍の筆と思われるが、歌友が会同した時の作だから、原田鶴斎か富取正誠かも知れない。中間の印譜は月華星彩か。月華亭は定珍の号である。

第七図

ひさかたのあめのはれまにいでて見ればあほみわたりぬよものやま／＼

* 前図と同じ阿部家横巻の一部。「わりぬ」を抹削した線が美しい。

第八図

やまたづの むかひのをかに さをしかたた。(重字)てり かみなづき しぐれの

あめに ぬれつゝたり

沙門良寛書 (一九五頁)

第九図

このみやのもりのこしたにこどもらとてまり。(脱字)つきつゝこの日くらしつ

良寛書 (二五八頁)

第一〇図

われながらうれしく。(脱字)もあるかみほとけのあますみくに／＼ゆくとおもへば

良寛書

こゝろこそこゝろまどはすこゝろなりこゝろのこまにたつなゆるすな

良寛書

かにかくにもものなおもひそみだぶつのもとのちかひのあるにまかせて

良寛書 (一一五頁)

第二一図

よのなかはとともかくてもおなじことみやもわらやもはてしなけれ[△](脱字)ば
* れ(礼)の字を右に○印を付して追補し、氣と婆の間にも○印を付す。

第二二図

うたもよまむてまりもつかむのにも[○]にも[○](二字重複)でむこゝろひとつをさだめか
ねつも (二九二頁)

第二三図

ひさかたのあまきるゆき[△](二字脱)と見るまでにふるはさくらのはなにぞありける

第二四図

ごくらくにわがちゝははおはすらむけふひざもとへゆくとおもへば

良寛書 (一一四頁)

第一五図

てぬぐひでとしをかくすやばむおどり

良寛書

(一七八頁)

第一六図

わがこひはふくべでどじよをおすごとし

沙門良寛書

(一八一頁)

第一七図

秋ひよりせむば△(脱字)すゞめのはをとかな

良寛書

(二三七頁)

第一八図

あいはせにすむ とりはきにとまる ひとはなさけのしたにすむ

第一九図

むかふやまで ひかるものは つきか ほしか ほたるか つきじやなひものほ
しやなひもの あれこそとのこの たいまつ たいまつが したひまわりて したの
ちよしよきぬ……

(一七九頁)

第二〇図

以南か句

(五三頁)

第二一図

あしびきの くがみのやまの ふゆごもり ひにくx(贅字)ゆきの ふるなべ
に ゆきゝのみちの あともたへ ふるさとびとの おともなし うきよをこゝに

かどさして ひだのたくみが うつなはの たゞひとすじの いはしみづ そをいの
ちにて あらたまの ことしのけふも くらしつるかも (一二六頁)

さよふけていはまのたきつおとせぬはたかねのみゆきふりつもるらし

第二二圖

窮谷有_二佳人_一 容姿閑且雅 長嘯如_レ有_レ待 独立脩竹下 良寛書 (一七五頁)

第二三圖

をやまだのかどたのた_{△△} (二字脱) ゐになくかはすこゑなつかしきこのゆふべかも
間庭百花_{ひらき}発 余香入_二此堂_一 相对共無_レ語 春夜々_{まさになかばならんとす} 将_レ央 (二三五頁)

第二四圖

正月十二日夜。春夜二三更 等間出_二柴門_一 微雪覆_二松柏_一 孤月上_二層櫓_一 思_レ
人山河遠 含_レ翰思万端

つきゆきはいつはあれどもぬばたまのけふのこよひになをしかずけり (一七五頁)
与板大坂屋 良寛。維馨老。

第二五圖

家有_二猫与鼠_一……

(一三六頁)

自_レ從出家_二後……

(一六頁)

青山前与後……

(二八三頁參考)

第二六圖

(上段) 雨晴雲晴氣復晴 心清遍界物皆清 棄_レ世棄_レ身為_二閑者_一 初月与花送_二余生_一
淺間山頭猿捫_レ虱 白井江上人釣_レ鯨 麻衣隱元帽子 応器手持錫振鳴 我屋何処有_二
問人_一 須磨磯辺 鷗兄 藻草攪寄火吹著 空臍叩_二天下_一(太の誤)平 (二七五頁)
(下段) 佳人相呼喚 遲日戲_二江汜_一 長袖映_レ日鮮 垂帶逐_レ風靡 金釧繞_二柔臂_一 玳_二
瑁飾_二雙耳_一 折_レ華調_二行客_一 拾_レ翠遺_二公子_一 一顧擲_二千金_一 片言傾_二城市_一 粉黛漸_二
(暫の誤) 時仮 容華非_レ保終 歲暮 胡_二所_一待 搔_レ首立_二淒風_一 (一七三頁)

* 鈴木桐軒・文台の兄弟に贈ったもの。

第二七圖

生涯懶_△(脱字) 立_レ身 騰々任_二天真_一 囊中三升米 炉辺一束薪 誰問迷悟跡 何
知名利_△(脱字) 塵…… (九〇、一九一頁)

第二八圖

君看_二雙眼色_一 不_レ語似_レ無_レ憂
沙門良寛書 (四七頁)

第二九圖

今日乞^レ食逢^二驟雨^一 暫時回避古祠中 可^レ咲一囊与一鉢 生涯蕭灑破家風

(一九二頁)

第三〇圖

十字街頭乞食了 八幡宮辺正徘徊 兒童相見共相語 去年癡僧今又来

沙門良寛書 (二五四頁)

第三一圖

対^レ君々不^レ語 々々意悠哉 帙散床上書 雨打簾前梅 良寛書 (二〇、一九七頁)

第三二圖

前図に同じ。たゞし、悠の字を脱し、また、転句と結句が顛倒している。 (二三八頁)

第三三圖

袖裏毬子直千金 謂言好手無^二等匹^一 箇中意旨如相問 一二三四五六七

良寛書 (二五五頁)

第三四圖

裙子短兮(脱字) 褊衫長 騰々兀々只麼過 陌上兒童忽見^レ我 拍手齊唱放毬歌

良寛 (二五五頁)

第三五圖

柳娘二八歳 春山折^レ花^レ歸[△] 歸[△]（脱字）来日已夕 疎雨湿^三燕^{えんし}支^一 支^レ願^{さくえん}若^レ有^レ待
寒^{かんげ}衣^レ歩^レ遅^レ々 行人皆佇立 道^い是^う誰[△]（脱字）氏兒 釈良寛書 （一七四頁）

第三六圖

寒^{かんざん}山忘却来時道 拾^{じつとく}得^{ひきい}相^{ひきい}率^{ひきい}（脱字）携^レ手^レ歸^レ
率の字を落款の上に追記している。 越州沙門良寛書

第三七圖

何卒^{はくせつこう}白雪^{はくせつこう}燕^{えん}少^{せう}々御惠たまはり度候。余の菓子は無用。沙門良寛。十一月五日。山
田杜^と皐^{こう}老。 良寛 （一三三頁）

第三八圖

白雪^{はくせつこう}燕^{えん}少^{せう}々御惠たまはりたく候 以上。十一月四日。良寛。菓子屋三十郎殿。
（一三三頁）

第三九圖

このあひさむさいやましに候へども、ことなふうちくらしまいらせ候。さけ、は
わたこ（葉煙草の意か）、やまのいも、のり、かんびやうたまわり、相とゞき候。先ごろ
は、たびとゞき候。早々かしこ。霜月十日。 良寛

* 寺泊の外山茂右衛門に嫁した妹むら子に宛てたものという。

第四〇圖 先日本間より遣候状ハ信ニ私に候。御あづけおき申候錢たまわり度候。以上。

八月廿九日。雄平老。良寛

第四一圖 雪の中に人を被遣候とも、近ごろは物書事すべて不出来候。筆ものこらずきれば

て候。たとひ有ても手にとらず候。何処から参り候とも、みな／＼如斯候。以上。霜月四日。良寛

(二四一頁)

第四二圖 万葉書了候間大坂屋へ御返し可被下候。此次の巻を借度候。それハ此中の状に委細

申越候。何卒明日にも人遣度被下候。朱墨も残少々に(にの字は右横)なり候間、一丁たまはる可候。げたの緒も。竝に筆一本。早々かしこ。十月廿九日。良寛

* 阿部定珍に宛てたもの。

(二〇五頁参考)

第四三圖 般若心経(写経)

第四四圖 周藏殿。良寛。此度貴様かんだうの事にニ付……

(二六三頁)

* 宛名がさきにあるのは、封筒を用いず、紙を終りから捲いて、その部分だけ出したため。

本文図版

第四五図	人間是非一夢中	六八頁
第四六図	一朝怒忘其身……	七三頁
第四七図	巡唱。敬白大衆……	九一頁
第四八図	あまつたふひはかたぶきぬ……	九九頁
第四九図	昨日所是、今日復亦非……	一〇七頁
第五〇図	次ニ来韻。頑愚信無比……	一一一頁
第五一図	国上下兮乙子森……	一一九頁
第五二図	今日人遣候。何卒みそ……	一三二頁
第五三図	先日はもんぱのたび……	一三九頁
第五四図	庭の白石とのごとおもて……	一七八頁
第五五図	夜雨	一八二頁

第五六図 あめのふる日は……

第五七図 関雪光裡五十年……

第五八図 閑々舎

第五九図 いろは

第六〇図 二ツノ辞ヲヘル

第六一図 先日申上候とうゆ涌井に……

第六二図 おらがの

第六三図 第一受用具……

第六四図 天上大風

第六五図 代先生。諸国行脚来……

挿入地図

出雲崎附近図 四九頁

国上山附近図 一一八頁

島崎附近図

良寛関係地域図

一九〇頁

一九一頁

二二〇頁

二二一頁

二三七頁

二三九頁

二四六頁

二四七頁

二六二頁

二七三頁

二八二頁

卷末見返